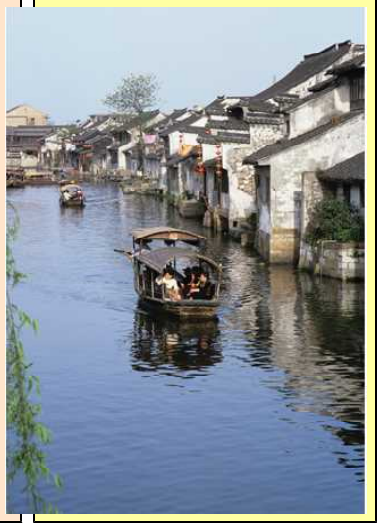
故郷第二場面　読んだ読んだ

三年二組　氏名

明くる日の朝早く、わたしはわが家の表門に立った。屋根には一面に枯れ草のやれ茎が、折からの風になびいて、～「おまえが着くおよその日取りは知らせておいたから、いまに来るかもしれない。」



主人公は我が家に帰ってきた。あまりにも暗く、ひっそり閑としている。母は優しく、もう迎えに来ていた。その裏には心配している気持ちもあった。母は機嫌の良いふりをしているのかどうか、さすがにやるせない表情は隠しきれない。すでに傷ついている息子を気遣ったが、あまりしたくない引っ越しの話になった。こんなどんよりとした空気の中、母が突然ルントウの話をした。無理矢理でも明るい話をしよう、それも母の優しさだ。

さん

主人公は古い家を売ったことに対して責任を感じず、彼の母は主人公に対し機嫌良くしようとしたり、主人公を休ませたり茶を注ぐなどして、引っ越しに対する抵抗を隠そうとし、引っ越しの話題になるとルントウの話に切り替え、同時に気分転換をもしようとしている。このように、重要な点に対し、抵抗心をもち、責任をもとうとしない点で、主人公とその母親は似ている。

くん

主人公は我が家を見て寂しさを覚えた。我が家の屋根一面には枯れ草のやれ茎が。これが我が家の古さを物語っていた。母はもう迎えに出ていて、主人公を座らせ、休ませ、茶を注いでくれた。いろいろ気を遣ってくれる母の顔には、やるせない表情が隠し切れていなかった。引っ越しの話を終えた後には、場の雰囲気を変えようと、母はルントウの話をしてくれた。そこには母の優しい気遣いが隠されているのであった。

さん

主人公は、我が家の表門に立っていた。その家は屋根一面が枯れ草のやれ茎に覆われていた。主人公には、草を取ってもらうお金もないのだ。家の庭先には、母が立っていた。機嫌の良いようだったが、それは主人公への気遣いだということが分かっていた。引っ越しの話を出さなかったが、とうとう引っ越しの話になった。このくらい話がいやで、母は突然ルントウの話にした。明るくしたかったようだ。

さん

主人公は我が家に帰った。母はもう迎えに出ていて、このことから母の優しさが伝わってくる。しかし、そのは派手もさすがにやるせない表情は隠しきれず、引っ越しをすることが相当悲しく、辛いのだということが分かる。また、すぐに引っ越しの話を持ち出せず、引っ越しの話をしても話題を転換しようとしているところから、母の現実から逃れようとしている様子が伝わってくる。まるで主人公のようだ。

くん

主人公は、我が家に行き、母の優しさと気遣いで、主人公を座らせ、休ませ、茶を注いでくれなどして、引っ越しの話はすぐに持ち出さない。母も、やるせない表情は隠し切れておらず、機嫌のいいふりをしていた。引っ越しの話になると、どんよりとした空気が流れていた。その場は明るくさせようとした、母の優しさである。

さん